



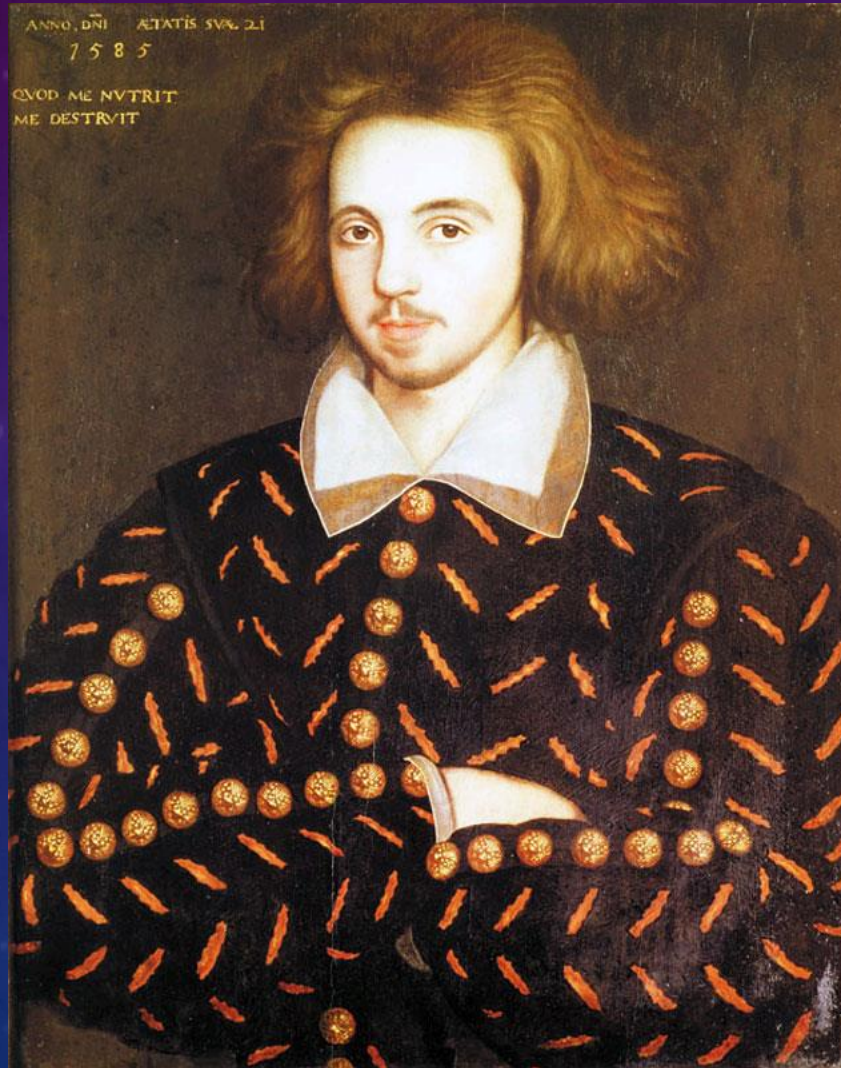
ゾルゲ事件への英国流視角

—C・アンドリューの新著『秘密の世界：
インテリジェンスの歴史』から

鈴木 規夫

はじめに

ケンブリッジとインテリジェンス



- A portrait, supposedly of **Christopher Marlowe**. There is in fact no evidence that the anonymous sitter is Marlowe, but the clues do point in that direction. Marlowe was 21 years old in 1585, when the painting was made. He was also the only 21-year old student at Corpus Christi, where the painting was later found.
- マーロウは1584年以降、少なくとも二度にわたり大学を無断で長期欠席した。しかもこの長期欠席のあいだ、マーロウがひそかにフランスへ渡り、ランスにあったカトリック教徒の秘密結社に加入し、女王打倒の陰謀に加わったという噂が流れた。これが修士号授与のさいに問題とされ、大学によって事情を査問されたが、マーロウの回答は大学側を納得させるものではなかった。マーロウはとある高官（名は知られていない）のコネを使ったらしく、まもなく枢密院からマーロウが「女王のために多大な働きをした」と記した書簡が送られてきた。これによってマーロウは修士号を得ることができた。
- マーロウは休学中に女王の諜報機関の活動に関与していたという説があり、一定の支持を得ている。彼がこのとき頼った高官というのも、諜報機関の長であるウォルシンガムに擬せられる。さらに彼は単に諜報に従事しただけでなく、敵方にも情報を流す二重スパイであったという説もとなえられている。(Wikipedia)



IN SINE SOLE
IRIS.



1. THE APOSTLES

- 私のケンブリッジ大学時代における最大の幸福は、会員の間では、ザ・ソサエティ (The Society / 学会) という名で知られていた —— この会のことを知っている外部の人たちは、使徒 (会) (The Apostles) と呼んでいた —— ある団体に結びついていた。(注: 以下, 「使徒会」という訳語をあてます。) 使徒会は、小規模の討論会 (討論を目的としたグループ) であり、平均して各年 (毎年), 1, 2 名ずつ入会しており、毎週土曜夜に会合をもっていた。使徒会は1820年以来存在しており、創設以来、ケンブリッジ大学の人間で、何らかの分野において知性に優れている人は、ほとんど会員になっていた。使徒会は秘密ということになっているが、それは、会員候補として検討 (対象) となっていることに当該人物が気づかないようにするためである。私がそのように早く、最も知り合いになる価値のある人々を知るにいたったのは、この' 使徒会' の存在のおかげであり、(また) ホワイトヘッドが会員であり、彼が若い会員たちに、サンガーと私が提出した奨学金請求論文をよく研究した方がいいと、薦めていたからである。ごくまれな例外を除いて、会員はすべて、いずれかの時期、個人的に親密な友人であった。(The Autobiography of Bertrand Russell, v. 1, chap. 3: Cambridge, 1967)

2. CAMBRIDGE FIVE

- 戦間期から1950年代にかけてイギリスで活動したソビエト連邦のスパイ網。暗号名から少なくとも5人のスパイが存在したことがわかっており、そのうち4人はキム・フィルビー（暗号名：スタンレー）、ドナルド・マククリーン（暗号名：ホームー）、ガイ・バージェス（英語版）（暗号名：ヒックス）、アンソニー・ブラント（英語版）（暗号名：ジョンソン）であると判明している。残りの一人はジョン・ケアンクロス（英語版）（暗号名：リスト）と見られている。5人とも1930年代にケンブリッジ大学で学んだことから「ケンブリッジ・ファイヴ（ケンブリッジ5人組）」と呼ばれる。彼らのリクルートは諜報史上、外国情報機関によるもっとも成功した例と言われ、ロシアでは「大物5人組」と呼ばれた。（Wikipedia）
- **英国ニュースダイジェスト 特集 ケンブリッジ・ファイブの二律背反 (3 July 2014 vol.1414)**
- <http://www.news-digest.co.uk/news/features/12372-cambridge-five.html>
- ……7日に公開された文書によって明らかになった。文書はイングランド (England) 東部ケンブリッジ (Cambridge) の「チャーチル文書記録センター (Churchill Archive Centre, CAC)」が20年にわたり秘密の場所に所蔵していた「**ミトロヒン文書 (Mitrokhin Archive)**」の一部。1972年からKGB情報員を務めた故ワシーリー・ミトロヒン (Vasili Mitrokhin) 氏は、84年に引退した後、92年に数千件に上る内部文書のコピーと共に英国に亡命した。公開された文書には、第2次世界大戦 (World War II) から少なくとも1950年代の冷戦時代までに英国の情報を旧ソ連に流し続けたケンブリッジ5人組の詳細が記されていた。
- 「元ケンブリッジ学生スパイは「酒浸り」、KGB文書 (2014年7月8日 AFP)」
- <https://www.afpbb.com/articles/-/3019937>

3. CHRISTOPHER ANDREW

- 英MI5創設から100年、スパイ史明かす公認歴史書を出版(2009年10月8日 AFP)
- <https://www.afpbb.com/articles/-/2650896?pid=4723451>
- ……英情報局保安部 (MI5) の創設以来100年間の活動を明かした公認の歴史書が5日、史上初めて世に登場した。2つの世界大戦や冷戦時代の諜報活動、現在のイスラム教原理主義勢力との戦いなどがベールを脱ぐ。
- 著者は英ケンブリッジ大学 (Cambridge University) の歴史学者クリストファー・アンドルー (Christopher Andrew) 氏で、題名は『The Defence Of The Realm (国土防衛)』。アンドリュー氏はMI5に保管される約40万冊のファイルにほぼ無制限の閲覧を許され、国内の情報活動を主とするMI5の活動を自らも体験して本書を書き上げた。……
- アンドリュー氏に2002年、MI5創設100周年を記念して本書の執筆を委託したのは、当時のスティーブン・ランダー (Stephen Lander) MI5長官だ。ランダー元長官によると、こうしたプロジェクトは欧米の情報機関で初の試みだという。
- 特に本書の企画にきっかけとなった出来事は、2001年9月11日の米国同時多発テロと、国際テロ組織アルカイダ (Al-Qaeda) 型の自爆テロ攻撃の可能性だった。こうした事態により、治安活動にそれまでよりもずっと大きな世論の支持が必要となった。……

- Spy agencies are worst at learning from past, say experts (Mon 8 Oct 2018)
- <https://www.theguardian.com/books/2018/oct/08/western-spies-no-better-than-russians-say-espionage-experts-christopher-andrew-annie-machon>
- The Secret World by Christopher Andrew review - espionage through the ages (Fri 28 Dec 2018)
- <https://www.theguardian.com/books/2018/dec/28/secret-world-christopher-andrew-review>

4. THE SECRET WORLD: A HISTORY OF INTELLIGENCE



5. そのゾルゲ事件への言及は？

- ゾルゲに言及している箇所はわずかに三箇所 (Sorge, Richard, 593-4, 627, 628)
- 1. 1930年代のソ連が、世界最高水準のSIGINTばかりでなく、エージェントの獲得においても大きな成果を上げていた (Cambridgeにおける 'Magnificent Five' などミトローヒン文書による記述) という文脈で、Arvid Harnack 指揮下の、潜在的に最も価値のあるNKVDイデオロギーエージェントネットワークによる、ドイツのソ連攻撃警告と共に、第四軍のゾルゲの日本での諜報活動が紹介されているものの、基本的にOtto大佐 (大使) がベルリンに送っていた情報の収集について言及しているのみ。
- 2. 10月18日に日本の諜報網構成していたメンバーのほとんどが逮捕されるまでソ連との通信は生きており、尾崎などによる南進論情報もカヴァーしていたものの、各種のSIGINTで進んでいた暗号解読により、スターリンは日本がソ連を攻めない事を掴んでいたという事。
- 3. 泉顕蔵 (NERO) との対比。ゾルゲは逮捕されたものの、1941年11月27日付の東京からベルリンへの電報はモスクワへ流れていたという事。

むすびに

- 情報史と国際政治史、外交史、国際政治研究との関係は？ fAKEニュースの最中に。
- 情報機関の資料は簡単には公開されない→通信傍受SIGINTの記録は秘中の秘（ex.1917年ツインメルマン事件 第一次世界大戦へのアメリカ参戦契機の情報、公開は2005年！、大韓航空機事件等など）
- アンドリュー教授のように公開情報などに依拠しつつ一定の解明進めば、秘密にしている意味合いがなくなる（「歴史の失われた断片」最後の足りない1ピースがインテリジェンス資料）
- 「けしからん！資料が少ないからといって言い訳などしてはならない。イギリスのインテリジェンス研究にしても、一昔前まではほとんど公開されている史料などあったが、それでも私はやってきた。それに史料が少ないのはインテリジェンス研究に限ったことではない。例えば中世史の研究を見たまえ。史料が少ないという理由で歴史が記されなかったことがあるかね。あなたの言っていることは研究者の怠慢に過ぎない。」（アンドリュー教授—小谷賢氏証言）
- ‘Perfect Weapon’ (D.E.SANGER) のアリーナとしての Cyber Space と量子暗号時代の情報戦の問題

参考サイト情報補遺

- 英MI5創設から100年、スパイ史明かす公認歴史書を出版
- <https://www.afpbb.com/articles/-/2650896>
- Stephen Lander
- https://en.wikipedia.org/wiki/Stephen_Lander
- Stella Rimington
- https://en.wikipedia.org/wiki/Stella_Rimington
- Jonathan Evans, Baron Evans of Weardale
- https://en.wikipedia.org/wiki/Jonathan_Evans,_Baron_Evans_of_Weardale
- Richard Dearlove
- https://en.wikipedia.org/wiki/Richard_Dearlove
- Is Sir Richard Dearlove seeking refuge from Chilcot?
- <https://www.theguardian.com/politics/blog/2016/may/17/is-sir-richard-dearlove-seeking-refuge-from-chilcot>

参考サイト情報補遺

- The Secret World by Christopher Andrew review – espionage through the ages
- <https://www.theguardian.com/books/2018/dec/28/secret-world-christopher-andrew-review>
- Spy agencies are worst at learning from past, say experts
- <https://www.theguardian.com/books/2018/oct/08/western-spies-no-better-than-russians-say-espionage-experts-christopher-andrew-annie-machon>
-
- The Secret World: A History of Intelligence
- <https://www.youtube.com/watch?v=Po56YMccTdk>
-
- Profiles in intelligence: an interview with Professor Christopher Andrew
- <https://www.tandfonline.com/doi/abs/10.1080/02684527.2017.1306949?journalCode=fint20>
-
- Christopher Andrew discusses his book on the History of Intelligence
- <https://www.iwp.edu/past-events/2018/11/27/christopher-andrew-discusses-his-book-on-the-history-of-intelligence/>

参考サイト情報補遺

- Review: The Secret World: A History of Intelligence by Christopher Andrew — spying from Caesar to Snowden
- <https://www.thetimes.co.uk/article/review-the-secret-world-a-history-of-intelligence-by-christopher-andrew-spying-from-caesar-to-snowden-rjgjz3v35>
- Looking back at spycraft over times new and ancient
- <https://www.washingtontimes.com/news/2018/sep/19/book-review-the-secret-world-by-christopher-andrew/>
- The Master
- <https://www.pem.cam.ac.uk/college/people/master>
- Tokyo Espionage: Legendary Soviet Spy Richard Sorge
- <https://www.nippon.com/en/nipponblog/m00143/tokyo-espionage-legendary-soviet-spy-richard-sorge.html>
- Commemorating wartime Soviet spy Sorge
- <https://www.japantimes.co.jp/opinion/2014/11/01/commentary/world-commentary/commemorating-wartime-soviet-spy-sorge/>
- ソ連のスパイとなったMI6スーパーエリートの「裏切り」
- <https://gendai.ismedia.jp/articles/-/52191>